

活躍する同窓の姿



浅田コーポレーション
代表 浅田 雅之 氏
神戸市西区伊川谷町にて接骨院・鍼灸院、リハビリデイサービスの運営をはじめセルフコンディショニングを取り入れたフィットネス事業など医療とスポーツを融合した事業を展開。

また、神戸マラソン公式トレーナーなどスポーツトレーナーとして第一線で活躍のほか、自身もトライアスロン選手として、兵庫国体(現 国民スポーツ大会)に出場。
地域活動では、人財育成をめざしたアサ大学での開講、地域の魅力を活かしたスポーツフェスの開催など地域に根ざしたドリームサポーターとして活躍。(1988年 日本体育大学 卒)

◆足を一歩前に踏み出す勇氣◆

浅田さんは、県立明石高校時代には野球部で甲子園をめざし、内野手として活躍された後、体育指導者をめざして1984年(昭和59年)に日体大に入學。深沢の第一学生寮に入寮し、高校時代の恩師(日体大OB)の勧めもあって研修部に所属し、授業では体育指導者をめざした大学生活を送る中、ある日の水泳授業で肩を脱臼した学生を授業担当の先生が素早く応急処置をされた光景を目にしたことで柔道整復師に関心が高まり、さらに、担任の先生が柔道整復師の資格をもっておられたことを知って、大学二次より、夜間に開設の日体柔整専門学校(現 日本体育大学医療専門学校)に入學し、昼間は大学授業、夜間は資格を取るための勉強に励まれたそうです。
失敗を恐れず、勇氣をもつて右足を一歩前に足を踏み出し、ダブルスクールで

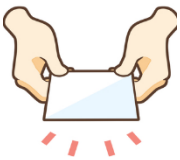
の学びにトライしたことが浅田さんのキャリアアップの原点となり、豊かなネットワークが築かれて行ったそうです。

◆人生はトライ&エラーの連続◆

浅田さんは、大学四年次に母校の県立明石高校で教育実習を行い、実習後も野球部のコーチとして連日、ノックで選手を鍛え上げ、母校を夏の全国甲子園大会出場に導くことができました。体育指導者の道、もしくはスポーツ医療の道のどちらに進むか迷われたそうですが、卒業後はスポーツ医療の道を選び、大阪の鍼灸専門学校での学びと病院勤務の傍らスポーツトレーナーとして休みなしで三兎を追っていく生活が続いたそうです。しんどいけれど楽しいといった感覚や自分が設定したゴールをめざしてのトライ&エラーが自分を大きくし、その後の接骨院・鍼灸院の開設や第一線で各種の事業展開につながっていったそうです。

◆一枚の名刺から広がった世界◆

浅田さんは、1990年(平成2年)にスポーツ医学研修の為に渡米されます。そのきっかけとなったのは一枚の名刺です。ある勉強会で医科大学の研究者の先生に「名刺をいただけませんか」と勇氣を出してお願いしたことが縁のはじまりで、後日、その先生から「米国研修に欠員が出たので参加しないか」との思いがけないお誘いがあり、浅田さんは絶好のチャンスと捉え、米国研修に参加されたそうです。その研修では、ロサンゼルス・ドジャースのチームドクターであり、トミージョン手術で有名なジョーブ博士のクリニックを訪問するチャンスに恵まれ、一枚の名刺が縁をつないでスポー



ツ医学における最前線での学びにつながったそうです。このほかにも、当時のアメフトチーム・サンディエゴチャージャーズの見学やカールルイス選手のトレーナーとの出会いなど、思いがけない巡り合わせで世界が広がっていったそうです。

◆やればできるー浅田イズム◆

失敗を恐れず「やればできる」という信念をベースにしたアサダイズムを心のよりどころとして1992年、当時26歳の浅田さんは接骨院を開設され、西洋医学と東洋医学を融合した医療を通じた心身両面のサポートで顧客の満足度を高めていかれたそうです。さらに、院長と並行しながら実業団のバレーボールチームやオリンピック選手のトレーナーとして第一線で活躍する選手のパフォーマンスを高めていく中で、選手の能力を引き出すために必要なコミュニケーションや相手が求めているものを丁寧に拾い上げ、相互信頼の関係を築きながら双方で考えていくことの大切さに気付き、その経験がインフォームドコンセントを重視した治療につながっていったそうです。
筆者が訪問した際も、リハビリに励む高齢者の皆さんと指導する浅田代表との間には、ほのぼのとした笑顔あふれるコミュニケーションが交わされていました。
また、接骨院の棚には、通院した中学生がそれぞれの願いを書いた部活の目標ノートがきれいに整理されており、浅田さんの心に寄り添った温かいサポートが来院者の心に火を灯し、自分を信じて「やればできる」といったアサダイズムが通院者一人一人の心に浸透していることがわかりました。



◆ドリームサポーターとしての姿◆

2015年明石公園陸上競技場の命名権を取得し、アサダスタジアムとして地域貢献とスポーツ振興に取り組むなど、生まれ育った明石・神戸



の街を「医・食・住」を通して元気にしていきたいという思いがスポーツフェスや講演会の開催など次々と具現化されていきました。さらには海洋交流都市・明石の魅力を活かし、共感で人をつなぎ、協力を得ながら実行委員長として明石国際アクアスロン大会(写真裏)を開催し、スポーツと観光を融合させたスポーツツーリズムで地域を盛り上げ、時代を切り拓く画期的な取組が続けられています。
浅田さんは、自分の夢だけでなく地域の夢につながるストーリーを溢れる笑顔と幸せ感じっぱいの言葉で語って下さり、その姿こそが、ドリームサポーターと呼ばれる所以であると思いました。

【編集後記】「アサダメソッド」を通じて質の高い生きがいや満足度をめざしたQOL(クオリティオブライフ)実現に取り組みられている浅田さんの言葉には説得力があり、夢と志が秘められていました。やればできる」と信じてトライ&エラーを繰り返しながら培った経験のすべてが「アサダメソッド」の中に蓄積されているかと思いましたが、最後に若い同窓に向けて言葉をお願いしたところ「右足を一歩前に踏み出そう」という言葉を頂きました。

浅田さんありがとうございました。
令和七年十月 文責 谷川彰一